

ある日本人の香港体験 : 和久田幸助覚書

著者	大東 和重
雑誌名	言語と文化
号	24
ページ	120(1)-102(19)
発行年	2021-03-01
URL	http://hdl.handle.net/10236/00029306

ある日本人の香港体験

——和久田幸助覚書——

大 東 和 重

はじめに

香港を描いた日本人の記録として古典の地位を占めるのは、山口文憲（一九四七年―）の『旅の雑学ノート 香港』（ダイヤモンド社、一九七九年。新潮文庫、一九八五年）、及び『香港世界』（ちくま文庫、一九八六年）の二冊だろう。一九七〇年代に滞在し、路上観察を行った山口は、香港という土地とそこに住む人々の息づかいを二冊の本に描き込んだ。今読んでも新鮮で、香港を歩く上で現在なお最上のガイドである。

「研究書で、香港という土地の面白さを伝えてくれるのは、可児弘明（一九三二年―）の著作、中でも『香港の水上居民 中国社会史の断面』（岩波新書、一九七〇年）である。現在では高層マンションへの移住が完了してほとんど見られなくなった、香港仔^{ほんこんざい}などの水上居民について、一九六〇年代に調査を行った民族誌である。水上集落は香港社会の縮図であり、香港の性

格を考える上で今も参考になる一冊である。

また、一九九七年の返還前後、香港の下町に住み、香港人をあらゆる角度から観察し、対話した記録、星野博美（一九六六年―）の『転がる香港に昔は生えない』（情報センター出版局、二〇〇〇年。文春文庫、二〇〇六年）や、食を通して街と人を描く、野村麻里（一九六五年―）の『香港風味 懐かしの西多士』（平凡社、二〇一七年）も、忘れがたい読後感を残す。

これらはいずれも戦後の記録で、残念ながら戦前の、香港社会の中へと分け入った日本人による記録は多くない。欧州航路の寄港地だったため、遠くヨーロッパへと旅行や留学をした著名人が数多く上陸し、日記や旅行記に行きずりの印象を書き残した。しかしいずれもごく短い寄港の、倉卒の観察に過ぎず、観光地点はほぼ重なり、記述は千篇一律で、この複雑な社会に錨を下ろした観察とはほど遠い。香港と双子のような都市上海については、日本人の居住者が多かったため膨大な数の記録が

残されたが、香港に滞在する日本人は絶対数が少なかっただけでなく、長期滞在者に文筆業者がおらず、細部にわたる記録の対象とならなかったのである。

そんな中で、戦前の香港体験を、主に戦後になって文字化した日本人に、和久田幸助（一九一五年―）がいる。天理外国語専門学校（現在の天理大学）出身の和久田は、広州や香港で広東語を学び、太平洋戦争が始まると、陸軍に徴用されて香港占領軍報道部芸能班の班長を務めた。広東の伝統演劇、粵劇にのめり込んでいた和久田は、演劇・映画人をはじめとする香港人と職務の範囲を逸脱した交流を持ったが、戦争末期、憲兵隊に逮捕され、日本に送還されたという。戦後の一九五三年以降、和久田は年に数回香港へ足を運んでは、芸能界の知友たちと旧交を温めた。

一九六〇年代後半以降、和久田は「私の中国人ノート」と題する一連の著作に、広州や香港に滞在した若き日々の回想を書き込んだ。和久田の詳しい経歴は明らかでない。この覚書では、戦前執筆の記事や、「私の中国人ノート」等の回想をもとに、関連資料で補足しつつ、和久田の香港体験の輪郭を描いてみたい。新型コロナウイルス流行のため、香港側の資料を現地で調査できなかつた点を、最初に断っておきたい。

一 略歴と著作

最初に和久田幸助の経歴を簡単に記すが、資料が少ないため、その経歴には不明な点が多い。『私の中国人ノート』（講談社文庫、一九七九年）や『日本占領下香港で何をしたか 証言昭和史の断面』（岩波ブックレット、一九九一年）に付された略歴には、天理外国語学校広東語部卒、一九三四年四月から四三年末まで広州・香港に滞在、とある。その間、南支那派遣軍艦「嵯峨」通訳、香港総領事館嘱託、同書記生、華南文化協会職員、香港占領軍報道部芸能班長を歴任した、という。

和久田幸助の代表作である「私の中国人ノート」は、一九六六年一月から七九年四月までの約十三年間、雑誌『サッポロ』（サッポロビール発行）に連載された。七二年に新潮社から『私の中国人ノート』と題して刊行され、七七年、自由現代社から『私の中国人ノート2』が刊行された。さらに七九年、この二冊を再編集して、講談社文庫に『私の中国人ノート』として収められ、その後も講談社文庫として、『続・私の中国人ノート』（一九八一年）、『続続・私の中国人ノート』（一九八二年）、『新・私の中国人ノート』（一九八五年）、『最新・私の中国人ノート 民衆は何を考えているか』（一九九〇年）の計五冊が刊行された（以下、ノート、続、続続、新、最新、と略称）。和久田はこのシリーズを「ライフ・ワーク」と呼んでいる（最新「ま

えがき」三頁)。香港体験についてはほかに、『日本占領下香港で何をしたか』(前掲)があり、他の著作に『能の素晴しさ狂言の面白さ』(わんや書店、一九七九年)がある。

「私の中国人ノート」は、タイトル通り、中国人の民族性や社会論、プロレタリア文化大革命を代表とする同時代の政治の観察、毛沢東や江青・鄧小平の人物論など、広く体験的に、多岐にわたって中国を語る。「私は広東語が専門なので、私のいう中国人とは、主に広東人」(ノート「日本鬼・日本仔」二四二頁)というように、和久田の経験した中国が広州・香港など華南地方であり、広東語を学んだため、南方から観察する点に特徴がある。

戦前には中国事情に通じた、「シナ通」と呼ばれる日本人がいた。大きく軍人・外交官と民間人に分けられるが、大半は北京もしくは上海に居住し、中国語標準語、及び一部が上海語を用いて中国を観察し、様々な記録を残した。相田洋は代表的な「シナ通」として、北京の辻聴花(二八六八―一九三二年)、中野江漢(二八八九―一九五〇年)、上海の井上紅梅(二八八一―一九四九年)、大連の柴田天馬(一八七二―一九六三年)、さらに日本在住ながら中国全土を旅して歩いた、後藤朝太郎(二八八一―一九四五年)の計五名を取り上げている。⁽²⁾こうした「シナ通」と比べたとき、和久田は異色の「南シナ通」といえる。⁽³⁾和久田自身は雑誌『サッポロ』の連載「中国人ノート」で、

肩書を「広東語学者」と記している(一九七四年十月号)。

一九四九年に新中国が成立して以降、「竹のカーテン」で閉ざされた社会主義国家を観察する上で、香港は数少ない窓口の一つだった。和久田は戦後しばしば滞在し、旧友との交友を温め、香港を通して同時代の中国を観察した。しかし和久田にとって、戦前に青春を過ごし、当時知り合った人々がのちのちまで歓迎してくれる香港は、情報収集地以上の意味を持っていた。結果として、「私の中国人ノート」にはしばしば戦前の体験の回想がはさまれた。

「私の中国人ノート」には部分的ながら中国語訳がある。「梅蘭芳と胡蝶」(初出は『文藝春秋』一九六五年十月)は、「梅蘭芳胡蝶戦時在香港」と題して、香港の月刊誌『明報』一九六六年六月号に掲載された。⁽⁴⁾香港メディア界に友人を持ち、半月刊誌『展望』にはしばしば和久田の文章が翻訳掲載され(一九八二年二月十六日)、また和久田から記事を寄せたという(一九七二年九月十六日、七三年二月一日、同年八月一日)。

和久田の名前は、胡蝶の回想録『胡蝶回憶録』(胡蝶口述、劉慧琴整理、聯合報社、一九八六年)など、占領期を経験した香港人の回想に登場することから、香港の芸能界や報道界で一定の知名度があったと思われる。和久田に関する記事はしばしば香港メディアに掲載されたようで、「私事にわたって恐縮千万だが、私のことが香港の新聞雑誌の記事になるのは戦争中

からのことで、そうとり立てて珍しいことではない」と述べる（新「香港獅子会に招かれて」一〇二頁）。例えば、後述する粵劇の名優、薛覺先との占領期における交渉については、香港の左派系新聞『大公報』一九六〇年九月二十一日に、「和久田到訪 威迫兼利誘 薛覺先歴險記之四三」なる記事がある。また同じ『大公報』一九八三年三月十二日には、「日作家和久田幸助昨在港談中日關係」なる記事があり、和久田の香港島ライオンズクラブにおける講演が紹介されている（講演の内容や経緯は、新「香港獅子会に招かれて」に詳しい）。香港のジャーナリストの知人が、折に触れ面白おかしく記事を書くこともあり、香港の新聞雑誌での自身の肖像は、「戦争中、中国の人達に与えた日本人の悪印象から抜け出せることはなかった」と述懐する（新「香港獅子会に招かれて」一〇六頁）。『香港電視』半月刊なる雑誌に「惨痛的漿糊」（一九八〇年四月十八日）「惨痛的回憶」（同年四月二十五日）なる記事が掲載されたときには、和久田も事実無根だと憤慨した。「和水田」なる名前の日本軍芸能班長が登場する、連続テレビドラマもあったとのことで、香港の友人からは、「香港のマスコミが、もし日中戦争や香港陥落にひっかけて、誰か日本人を取り上げるとすれば、やっぱり、和久田ってことになるんじゃないのかね」と妙な慰められ方をしている（続「惨痛的戦争の余波」二六二―三頁）。

和久田に関する先行研究は少ないが、邱淑婷『香港・日本映

画交流史 アジア映画ネットワークのルーツを探る』（東京大学出版会、二〇〇七年）や、周承人・李以莊『早期香港電影史 1897-1945』（三聯書店（香港）、二〇〇五年。上海人民出版社、二〇〇九年）は、和久田の占領期の活動に言及する^④。また邱淑婷『港日影人口述歴史 化敵為友』（香港大学出版社、二〇一二年）には、錢似鶯「憶述香港淪陷期間和久田幸助之角色」が収録されている。

二 華南旅行と広州留学

和久田幸助は一九一五年、東京に生まれたと思われるが、詳しいことはわからない。能・狂言を論じた文章を集めた、『能の素晴らしさ 狂言の面白さ』（前掲）に、宝生流の能楽師、近藤乾三（一八九〇―一九八八年）が寄せた文章では、和久田を形容して、「和服がよく似合い、気性もさっぱりと竹を割ったようで、義理人情にも厚く、その上大変几帳面で、いい意味での江戸っ子の典型」だと呼んでいる（二一頁）。和久田は幼くして能や狂言、文楽や歌舞伎を好んだといい、この伝統劇愛好がのちに、京劇や広東の伝統劇、粵劇を好む素地となった（ノート「わが友・薛覺先」一七二―三頁）。戦後は能の近藤と狂言の六世野村万蔵（一八九八―一九七八年）に親炙し、「私の生活は、本業の中国関係と能狂言に二分」された、と記している

『能の素晴らしき狂言の面白さ』前掲、一頁)。

和久田が初めて中国の土を踏んだのがいつなのか、回想によつてやや異なる。「中国百年」(ノート、一一一頁)によれば、一九三二年、数えて十九歳の時だったという。「香港獅子会に招かれて」(新、九五頁)では、初めて広州を訪れたのは、数えて十八、満で十六歳の時だったとする。一方、記録に残るのは、三四年夏、恐らく満十八、九歳で、天理外国語専門学校の外事情視察旅行団の一員として、上海・香港・広州・広西を旅した経験である。^(五)「中国百年」によれば、和久田は広東語部の学生で、クラスは全員で十三名、夏休みに語学の実習として、広東語部担任の鄭兆麟に引率され、広州へと赴いた。天理大学の校史によると、一九二五年に創立された天理外国語専門学校には支那語部があり、第一部が北京官話、第二部が広東語を専修していた。第一期の学生数は、第一部が二十五名、第二部が二十四名と、北京官話と広東語を学ぶ学生はほぼ同数だった。三四年の海外修学旅行団は学生のほぼ全員が参加した。^(六)

一九三四年夏の滞在の記録として、和久田は長文の「南支見聞記」を記した(天理外国語学校編『海を越えて 昭和九年海外旅行記録』天理外国語学校、一九三五年)。記録によると、三四年六月二十八日、上海を経て香港に到着した一行は、翌日広州に着き、三週間余り滞在の予定だった。ところが広西省の招待で、急遽約二週間の旅行が計画され、教員一名に引率され

て、和久田ともう一名の学生が参加する。七月六日汽車で三水に向かい、汽船で梧州へ、省都南寧に滞在し、さらに柳州や桂林を見て、同月二十一日広州に帰着した。二十二日帰国の途に就き、神戸に帰着したのは三十日、全部で一か月余りの行程だった。香港での自由時間の記述に、「始めて一人で、ほんとうの支那へ来て使ふ言葉——妙にくすぐつたかつた」とあるので、もしかするとこれ以前、家族などとともに訪中した経験があるのかもしれないが、少なくとも実質的な中国経験はこれが最初と思われる。

あこがれの中国旅行だったが、広西見物を中心とした「南支見聞記」の中で目立つのは、抗日運動に関する観察である。南寧では、「煙草に燐寸に、どこの田舎の白壁にも抗日、打倒日本は高くか、げられてゐ」たという。桂林では、接待してくれた、日本の陸軍士官学校卒業生である「民軍団」の中国人中佐、及びその日本人妻との出会いがあった。桂林の七星巖の入口まで行きながら、中を見学しなかつた理由について、日本人妻が和久田らに対しひそかに説明するには、七星巖は要塞でもあり、「この排日の盛んな所で、日本人を七星巖に入れないのは道理」で、「日本人など来たら、断然排日歌を合唱してやる、とか、打倒日本を叫んでやる、とか口々に」罵る声があった、という。また和久田は、武鳴で民団軍を観察し、その熱心な養成ぶりから、「彼等にこの服装をとらせて日本陸軍の服装をさ

せたら、決して見劣りはしないだらうといふ、強い心意気を感じさせる」との感想を漏らす。和久田に強い印象を与えたのは、華南における抗日熱の激しさだった。「孫文の三民主義の実現と打倒日本、小学校に入るとまづそれを教えるのださうである。

／この教育方針を十年このかたとつてゐる、南支の排日をとく事は、泰山をゆるがすより難しい」と痛感させられた。

一九三四年夏の記録の最後に、和久田幸助は、「もう一度是非南華を旅してみたい」との希望を記した。願いは二年後になう。三六年初春、日中戦争勃発の前年、和久田は広州へと留学する（ノート「日中相互不理解」）。和久田はのちに広東語学習の動機を、「私が十六歳という若さで初めて広州の土をふみ、爾後、広東語の学習にはげんだことは事実だが、それは全く日本の布石などではなく、当時の日本では、まだ誰も手がけていない広東語にとり組んでみたくて、自費留学した」と説明している（新「香港獅子会に招かれて」一〇四頁）。

当時は華南のみならず、中国全土で抗日救国運動が盛り上がっており、和久田は中山大学への入学を希望したが、かなわなかった（ノート「日中相互不理解」）。広東人と混じって市街地に住むこともできず、租界のあった沙面の日本人宅に下宿し、家庭教師を頼んで広東語の勉強をしていた。二年前の華南滞在中で広西へ旅した際に、湖南省出身の政治家、荆嗣佑（荆冬青、一八九一—一九七二年）が道中の案内してくれた。荆は明治

大学で学んだ経験があり、流暢な日本語を話した。かつて荆から、困ったことがあればいつでも相談に來いと言われたの思い出し、荆宅を訪ねて窮状を訴えると、自宅に住まわせてくれた。

荆嗣佑宅に下宿し広東語の勉強をしていた和久田は、近所の大学教授の娘と交流し、映画を見に行ったり郊外へ遊びに行くなど、つかの間の青春を過ごした（ノート「ある大長征」）。広東語の学習を兼ねて、京劇や粵劇を見物するようになったのもこのころである（ノート「わが友・篩覚先」一七二—三頁）。一九三四年夏の広州滞在中、同じ広東語部の級友が、映画や粵劇を見物したと記しているので（梅本一雄「広東一日の生活」『海を越えて』前掲、八四頁）、和久田も二年前すでに目にしていた可能性がある。

また、一九三八年十一月刊行の『文藝春秋』第十六卷第二十号掲載の「香港雑信」には、二年前、「広東の珠江に警備艦〇〇の通訳として勤務してゐる時」との記述がある。三六年後半以降、恐らく生活費を稼ぐため、海軍の通訳をしていたと思われる。

しかし中国全土で抗日の気運は高まるばかりだった。粵劇の劇場通いをしていた和久田だが、「いくら言葉が出来ても、日本人が一人で芝居小屋へ出入りするのは危険ですよ」と忠告される（ノート「わが友・篩覚先」一七四頁）。一九三七年、日

中戦争勃発とともに、和久田は香港へと移動した。

三 日中戦争下の香港滞在

和久田幸助の回想によれば、一九三七年の日中戦争開戦後の香港滞在中、外務省の嘱託、のち通訳生として、二年ほど香港領事館に勤務したという（続「三十年ぶりの排日抗日の大波」二二四頁）。また和久田は、香港時代の友人に触れる中で、「信ちゃん（白石永信吉、一九二一—八二年）は同盟通信の記者として、私は総領事館の下っ端職員として香港に住み、毎日のように顔を合わせて、飲茶などを楽しんでた」と回想する（続「新馬師曾と私」一六二頁）。飲茶を楽しめる茶楼に詳しくあった和久田は、同盟通信の北支総局長と香港支局長を兼任していた松方三郎（一八九九—一九七三年）からも頼まれて、茶楼めぐりをしたという（『能の素晴らしき狂言の面白さ』前掲、八七—八頁）。香港へ移つてからも、和久田は広東語の学習に励んだ。また語学のためという名目で粵劇見物を受け、利舞台などを中心に、名優薛鏡先の舞台を見て回った。利舞台では京劇の名優梅蘭芳の引退興行も見たという。

日中開戦後の香港滞在時期の記録には、「澳門の印象」（『旅』第十五卷第七号、新潮社、一九三八年七月）、「香港雑信」（『文藝春秋』第十六卷第二十号、一九三八年十一月）、「香港と支那

の子供たち」（『文藝春秋』第十六卷第二十二号、一九三八年十二月）、「南支夜話」（『文藝春秋』第十七卷第十号、一九三九年五月）が残されている。これらの記事からは和久田の当時の中国観がうかがえる。

「香港雑信」は、広州で知り合った、李琴英なる中山大学の女学生との、香港での一年ぶりの邂逅を描く。和久田が日本語を教えていた中国人の家で紹介され、その「愛人」らしかったという李は、難を逃れて香港に着いたばかりだったが、「香港の難民を何時迄も続けるのは惨め」だと語った。和久田が別れの握手の際に、「ぢや、又、難民小姐（難民のお嬢さん）」と呼ぶと、李は「何にかぐつとくるものがあつたらしく」、「さよなら、侵略小爺（侵略者の若旦那）」と返したという。和久田は当時の日本と中国の関係を次のように描く（傍線引用者、以下同じ）。

日本が少くとも現在支那よりは全てにたちまざつた国であるといふことは自他ともに許されてゐるところであらう。そして支那に対する日本の態度は指導的であると云つても間違ひはないと思ふ。支那としては其れをひどく嫌つてゐるのであるが、而しその外交なるものは如何なる功を奏したであらうか、我が外交に対する不満等といふ文章が公然と発表される程日支間の齟齬は日々に拡大されてゆく、即ち善く云へば、日本の誠意有る指導に支那は随はな

いのであり、悪く云へば、日本の指導的なるものが支那にとつては有難迷惑と云ふか、余計なおせっかいかいとも云ふか、ともかく萬の助言よりも一つの実行、特殊条約のどれか一つでも取り下げてもらひたい、と横を向くのである。

日本側に立った記述ではあるが、中国側の不満を見落とさず書き込んでいる点、和久田はかなり柔軟な視点を持っていた。同じ「香港雑信」には、隣家の三つになる女の子の、たった一つ歌える歌が、義勇軍行進曲で、和久田の顔を見ると回らぬ舌で歌う、と記す。この曲は、「政府の集合で、学校で、或は公園で、劇場で、事変以来唄ひ尽くされて尚唄はれてゐる」。その理由として、歌詞が「支那側の口頭禪たる民族抗戦といふ意識を端的に表現」しており、その爆発的流行は「支那の抗日過程を其のまゝ、物語つてゐる」と述べる。

後述するように、和久田はのちに日本占領下の香港で、軍報道部芸能班の班長として活動した。ただし、和久田が芸能関係の対策に関わるのは、太平洋戦争が勃発し、香港が日本によって占領されて以降ではない。『東京朝日新聞』一九三九年五月十六／十七日夕刊に、「支那の映画戦線」(上下)なる記事がある。「事変以前から南支にあり最近帰朝した前海軍嘱託和久田幸助氏」に聞いた、というもので、和久田は冒頭、次のように語る。

支那の民衆位芸術——音楽や芝居映画を好む者はないでせうが、その芸術が目下の状態では殆ど全部が抗日なので、すから憂慮すべきです。私は文化工作は先づ、この抗日芸術戦線をブチ壊して、正しい意識の下につくられた芸術を支那の民衆に与へる事だと信じてゐます。

和久田の肩書は「前海軍嘱託」となっているが、著書に記された略歴のうち、これが南支那派遣軍艦「嵯峨」の通訳を指すのか、もしくは香港総領事館の嘱託や外務省書記生を指すのか、判然としない。しかしいずれにせよ、一九三九年五月の段階で、新聞社からインタビューを受けるような立場にあったことは間違いない。

和久田は粵劇以外に映画も数多く見てきたが、それには多くの抗日映画が含まれていた。戦後の回想によれば、「満州事変以後、中国の映画界からは、おびただしい数の抗日抗戦映画が作られた。抗日を表面に売らないまでも、民族の団結と統一を謳わないものはなく、それは、日中戦争の拡大、長期化と共に、日一日と熾烈になっていった」という(ノート「抗日昨今」九五頁)。ここでいう「抗日抗戦映画」とはどのようなものを指すのだろうか。

韓燕麗の論文「国防映画運動とは何か」によれば、一九三一年の満洲事変後、民間の映画会社が抗戦映画を撮り始めたが、

本格化するのは、国民党政府がお墨付きを与える三六年以降だという。戦前中国の映画は上海を中心に作られていたが、日中戦争開戦後、三七年十一月に租界を除く上海が陥落し、多くの映画人が内陸の武漢・重慶や、英国植民地の香港へと逃れた。香港は上海に代わり映画産業の中心地となり、広東語の国防映画が盛んに作られた。⁽⁶⁾ 和久田が見た「抗日抗戦映画」とは、この国防映画を指す。

回想「三十年ぶりの排日抗日の大波」(続、二二四頁)によれば、総領事館に勤めていた和久田はある日、総領事から呼び出され、中国映画、特に抗日映画に詳しいか、と質問される。抗日映画では、日本兵が略奪や強姦をほしきままにし、軍が無差別爆撃をする様子が描かれていた。総領事は和久田に対し、抗日映画に対抗して、日本側が発行する中国語新聞紙上で、映画評の形を用いて、「わが皇軍は、絶対、そんな野蛮行為は行わない」というキャンペーンを遂行してほしい、と依頼してきたという。命を受けた和久田は、「抗日抗戦映画の御用批評家」を一年ほど務めたが、しかし、「それも今では、どす黒い思い出となつて、私の心の中に、重くよどんでいる」(続「三十年ぶりの排日抗日の大波」二二六頁)。『東京朝日新聞』の一九三九年の記事は、この「御用批評家」時代に一時帰国し、インタビューを受けたものではないかと思われる。

また、『日本占領下香港で何をしたか』(前掲)では、日本の

香港攻略の一年ほど前、頼まれて広州の「日本華南文化協会」で中国語雑誌の編集をしていた、と回想している。この「日本華南文化協会」とは、一九四〇年、南京に本部の「總會」を置いて設立された、中日文化協会の華南支部を指すかと思われるが、詳細は不明である。⁽⁷⁾

和久田は『東京朝日新聞』のインタビューで、ほとんど全部の抗日映画を見た、といい、登場する日本人に誇張があると指摘し、特に上海で作られた「木蘭従軍」のように、「外見ジャンダークのやうな女丈夫を扱った昔噺を主題にしたものですが、底意は立派な抗日映画」に気をつけねばならぬ、と述べる。しかし今や広州も日本軍に占領された以上、香港の映画界も「今迄のやうなこけおどしに似た抗戦映画では、どんな愚民も欺瞞し難いことが明白」となるだろう、と一方的な希望的観測を語った。

さらにこの時期の和久田の活動を知る手がかりとして、『日本映画』に寄稿した、「重慶・香港の映画界」(一九四一年十月)、「重慶・香港の抗日映画を衝く」(『日本映画』一九四二年一月)がある。韓論文でも紹介されている二篇だが、重慶と香港で続々製作されている抗日映画を紹介しつつ、両地、ことに香港の映画界が、「政府の指導と文化人の側面的啓蒙によつて、漸次映画の持つ文化的、国家的使命を自覚し、遂には現在のやうな「娯楽」「芸術」「教育」「建設」を加へた優秀作品を生むやうに

なつた」と、中国映画界の「死物狂ひな努力」を説くとともに、返す刀で、日本の映画の自覚のなさを嘆いている。

先の「香港雑信」に記された、日中関係に関する観察は、「重慶・香港の映画界」の末尾に記された次の一文と呼応している。

以前から余り好意を持たれてゐなかつた指導者を自任するAといふ男が、海の彼方から突然やつて来て、B女史の肩を叩き、「おい、結婚しやう」では、絶対に解決は不可能である。B女史に、Aの生活、思想、目的を判らせなければならぬばかりでなく、Aに対する彼女の愛情を喚起しなければならぬ。ところがAはもう四年近くもB女史の肩を叩き続けてゐるが、B女史は依然としてそつぽを向いてゐるのである。B女史のそつぽを向く原因には、第三者のC、D、Eが大いに関係してゐることは勿論であるが、当事者のA氏、B女史の間に、結婚の第一段階第一歩である根本的な相互理解と愛情への真剣な努力が始められてゐないといふことが最大原因である。

当然ながらAは日本、B女史は中国を指すが、ここでは日本の中国に対するアプローチの問題を明確に指摘している。

もう一篇の「重慶・香港の抗日映画を衝く」は、重慶や香港の映画人が「此の超非常時にどの程度の覚悟をもつて彼等

の映画事業に従事してゐるか」を語る。湯曉丹（一九一〇—二〇一二年）という監督の文章を訳して長く引用しており、ここには、「現在の香港映画界は、（中略）「光明期」に達したと云へやう。これは云ふ迄もなく、我々祖国全体の進歩、我々中国人全体の自覚による結果に外ならない」、「我々は此の機会にこそ、総てを再検討し、国家至上と勝利を信念化して、慌てず、迷わず、飽迄映画を国家的、民族的事業に高めると同時に、各地の映画界と連絡を緊密にして、一致団結、来るべき困苦と闘争に備へなければならぬ」といった文言が延々並ぶ。監督の引用に続けて、映画俳優たちの決意を訳出しており、「我々は「中国人不打中国人」という一句を忘れてはならない」、「漢奸といふのはね、自分が中国人でありながら中国に害を与へる奴のことなんだよ」といった台詞がある。一文の意図は日本の映画人に自覚を促すことにあるが、実際には、あたかも中国人の抗戦の覚悟を訴えるごとき文章となっている。

映画の持つ威力と使命を考へた時、僕は日本の映画人が一刻も早く内にひめた情熱を燃へ上らせてくれ、ばと考へる。そして抗戦側映画人が、彼等の主義から飽迄抗戦映画を作るといふならば、我々は我々の主義、日華、東亜団結の必然性を映画として、抗戦中国人、又広く東亜の人々に呼びかけ、彼等を納得させなければならぬ。

やがて和久田は日本占領下の香港で、これら監督俳優たちに
対し文化工作を行うが、前途の困難を自ら予言するかのよう
である。和久田が総領事の依頼で執筆したという映画評は、現在
発見できておらず内容は不明だが、日本占領下の広州での工作
経験は、香港での活動にながしかつながつていることと思わ
れる。とはいえ、目睹の可能な記事から、領事館の宣伝工作に
従事していても、日本の中国に対する高圧的な姿勢に内心疑問
を抱いていたことが推察される。和久田は「暴支膺懲」を声高
に叫ぶような日本人とやや異なる姿勢の持ち主だった。それは
一九三四年の華南体験以来、一貫していたことだろう。

和久田はやがて外務省勤務をやめるが（統「新馬師曾と私」
一六三頁）、一九四一年十一月、所用ですでに日本の占領地と
なっていた広州へ赴いた際に、軍報道部から出頭を命じられる。
そのまま徴用され、広州に足止めされた。十二月七日夜、香港
攻略へ向かう軍に従うよう指示されて、その目的を理解する
（ノート「わが友・師覚先」）。和久田の起用について、香港領
事館と軍との間にどのような情報の共有があったのかは不明で
ある。

四 日本占領下香港での活動

一九四一年十二月に始まる、日本軍による香港占領期、和久
田幸助がどのような活動をしたのかについては、邱淑婷『香港・
日本映画交流史』（前掲）などの研究で触れられている。よっ
てここでは、和久田の回想を用いてその内心を描いてみるが、
後年の回想の限界がある点は留保しておきたい。

香港占領軍は国内で徴用してきた、新聞社や放送局の記者・
職員を、新聞班や放送班として組織した。さらに演劇・映画・
芸能・劇場を管轄する芸能班を設け、和久田を班長に任じた。

戦争中、日本軍が香港を占領した時、私は数少ない広東
語の専攻者として、軍に徴用され、映画演劇界の処理を担
当させられた。香港を含めて、広東省と華僑の住む東南ア
ジア一带は、広東語圏であり、広東の映画演劇は、広東語
が判らなければ、全く手をつけられなかったからである。

ノート「中国人と交際する法」一二二頁

私の所へは、広東語がわからなければ処理不可能な部門
の全部、すなわち広東語の映画、演劇にはじまり、文学、
詩歌、音楽などなど芸術、芸能関係の総てが持ちこまれ、
軍報道部内に新聞班等と共に設けられた芸能班の班長に否

応なく就任させられて、直ちにその処理の開始を命じられたのだった。その処理とは長年にわたる排日抗日の否定と、大東亜建設の宣伝だが、(中略)当時、まだ、ほんの若造だった二十五歳を出たばかりの私にとって、突如として日本軍占領下の住人となり、職も収入も失った香港芸術、芸能界数千人の生活相談にのるだけでも荷が重きに過ぎ、その重圧にひしがれて、とまどいの日々を送るはめになったのだった。

最新「天安門流血事件をめぐって」一五頁

和久田の仕事始めは、香港占領軍が管理していた米の配給だった。軍が差し押さえたため、香港市民は極端な食糧不足に直面した。広東語が話せて、粵劇や映画に詳しくた和久田は、この米配給により、香港の芸能関係者の信用を得る。

日本が占領した当時の香港には、先に陥落した北京や廣州、上海から、映画演劇の関係者が数多く逃げてきていた。粵劇の大ファンだった和久田は、芸能班の仕事を進める上で、役者や映画俳優、監督に協力を求めた。協力を求めた相手には、粵劇の名優だった薛覺先(一九〇四―五六年)、新馬師曾(一九一六―九七年)、広東語映画(粵語片)のスターだった呉楚帆(一九二一―九三年)、広東人の大女優胡蝶(一九〇八―八九年)、京劇の名優で香港に難を逃れていた梅蘭芳(一八九四―

一九六一年)らがいる。和久田は彼らとの交流を、「わが友薛覺先」(ノート)、「新馬師曾と私」(続)、「友あり―呉楚帆」(続)、「梅蘭芳と胡蝶」(続)等に描いた。

芸能班長としての和久田は、これら演劇映画関係者に対し、次のような条件を提案したという(続「友あり―呉楚帆」一九〇頁)。

一 日本の唱える大東亜共栄圏は、孫文先生の亜細亜主義をふまえたもので、世界の真の平等と平和の実現は、まず日本と中国が中心となって白人の世界支配から抜け出し、亜細亜の復興を計る以外に道はない事。

一 われわれ日本人は、これまで中国に対して行なってきたもろもろの試行錯誤と侵略行為を深く反省し、今日以後は平等互恵をモットーとして、孫文先生の意を体し、共に手をたずさえ、亜細亜の復興に当たる事。

一 したがって、協力者である中国人の生命、財産を保護し、自由を尊重する事。

一 その自由とは、もし日本に協力した結果、日本の政策や行政にあきたらず、重慶(時の中国政府の所在地)側に行くことを希望した場合、その希望実現をはばまない。すなわち、あらゆる思想行動の自由を保証する事。

和久田の提案が中国人の関係者から理解されていたことは、『胡蝶回憶録』（前掲）からもわかる。日本軍の手先とはいえ、広東語を話す「中国通」和久田の訪問を受け、日中の平等な立場からの協力、生命や財産の保護、重慶へ去ることも含めた自由の尊重、の三条件を提示された胡蝶は、次のように回想する。

私は和久田が悪人だとは思わなかったが、しかし、いわゆる無条件とは相対的なものにすぎず、実質的には条件があつて、それは自らの良心を売り渡し、自らの民族を裏切ることだと知つてもいた。侵略者と被侵略者の間にどんな平等が存在するといふのだろうか。生命や財産の保護や、個人の自由の尊重など交換条件の一つにすぎなかった。私と有声（「夫の潘有声」）は侵略者の慈悲にすぎることには希望を託すつもりなど全くなかった。そうだったからこそ、のちに日本軍の警戒を避けて、香港を離れ、大後方へと逃げる策を講じることができたのだ^(一〇)。

洪々協力した関係者だが、日本との協力は当然ながら上辺にすぎなかった。和久田に表面上協力の姿勢を見せた香港の映画演劇人たちは、機会を捕まえては香港から脱出し、重慶へと去った。

芸能班の仕事も、つまるところは占領行政の一環として行われたものなので、間に立った私^が、どんなに公平を旨とし、戦勝者の奢りを見せまいと苦心しても、軍当局には決してそんなつもりはないのだから、あらゆる点で中国人たちの自尊心を傷つけ、大きな不満を買ったにちがいないのである。結果は日中合作どころか、協力してくれた中国人のほとんどが反日家となり、遂には、日中戦争という泥沼の中で、日本軍は敗戦の憂目をみるに至るのだが、五人の顧問の場合も、全くこれと軌を一にしていた。

五人の顧問たちが、われわれ日本側にあいそをつかし、重慶側に逃げ出した日まで、うかつにも私は、そんな気配のあることに、全然気づかなかつた。

ノート「中国人と交際する法」一二四―五頁

戦後になって和久田は自責の念にかられる。自らの提示した条件を受け入れ、一時でも協力してくれたがために、「漢奸」のレッテルを貼られ、苦しい立場に立たされた人々がいた。「私^が正当だと信じて提示した三つの条件は、その人々を、たとえばような辛い道に追いやる「甘言」だったのである」（続「梅蘭芳と胡蝶」三六頁）。

大女優の胡蝶は『胡蝶遊東京』の撮影を迫られ、「決して侵略軍の看板となつてはならない、これは原則問題だ」と考え、

一九四二年、香港を脱出した^(二)。逃亡を知った東京の参謀本部は激怒し、問責の形で香港総督部へと通達され、幹部職員だった和久田の責任が問われたという(統「梅蘭芳と胡蝶」三四頁)。和久田が大ファンだった薛覺先は、香港で一年以上舞台上に立ったのち、マカオ巡業を願い出て、そのまま重慶へと去った。この折も和久田は逃亡を助けた責任を問われたという(『日本占領下香港で何をしたか』前掲、四七頁)。

和久田はしばしば公然と、こんなやり方では大東亜共栄圏はもちろん、中国人との提携も不可能だ、と口にしていた。その結果、日本の憲兵隊から目をつけられ、和久田に理解を示していた「参謀長」が転任するや、逮捕されたという(『日本占領下香港で何をしたか』前掲、五六頁)。

スパイ補助罪、通敵罪などという罪名を着せられた私は、本来なら死刑なんだぞ、とののしられながらも、死一等を減じられて永久追放となり、日本内地に送還され、東京の警視庁外事課の再審理にゆだねられたのだった。

統「友あり——呉楚帆」一九五頁

和久田がいつ日本に送還されたのかはつきりしない。一九四三年秋、上海を訪れた際には、梅蘭芳がホテルを訪ねてきて、自宅で夕食をもてなされ、大世界へ案内されて京劇を見

たという(統「中国への手紙」二二頁)。また、和久田に理解を示した「参謀長」とは、香港占領地総督部の二代目参謀長、菅波一郎を指すと思われる、任期は一九四二年十一月から四四年六月だった。よって和久田が送還されるのは、早くともこの月以降となる。和久田は占領地総督の磯谷廉介(一八八六一—一九六七年)には反感を持っていた(『日本占領下香港で何をしたか』前掲)。

和久田の香港における演劇映画界への工作がどのようなものだったか、具体的に知ることは難しいが、邱淑婷『香港・日本映画交流史』(前掲)は、工作の現場にはまだ二十代の若い和久田一人しかおらず、また和久田が映画人でなかった点から、香港映画へのインパクトの小ささを指摘している(三九頁)。和久田は日中戦争開戦後、まず総領事館勤務者として映画界における対中工作を経験した上で、太平洋戦争勃発後、香港占領軍報道部の芸能班長として活動した。しかし、広東語を話し、粵劇や映画が趣味というだけの青年に、たとえ一定の権力や活躍の場が与えられても、どの程度の仕事ができただかという点、疑わしいといわざるをえない。この点、北京やドイツへの留学経験があり、プロの映画人だった川喜多長政(一九〇三—八一年)の、上海での活動と比べると、やや酷といえる^(三)。演劇人に対し大甘の和久田を手先とした、下手な工作を避けて、映画人たちが香港を続々と無事脱出したことが、最大の成果といえ

るかもしれない。

和久田の回想でも多くの部分を占めるのが、日本占領下の香港における、日本軍の暴政に関する記憶である。

私は、日中事変から第二次世界大戦の末期にかけて、十年間を廣州、香港に暮し、広東語を専攻していたせいで、丁度、日本人と広東人の中間にいるような生活を強いられただので、廣州や香港の中国人たちが、勝利者であり、暴君であった日本人を、どう見てきたか、少しは理解してつもりである。

ノート「香港へ行ったら考えてほしいこと」五八頁
その中身は、「私の中国人ノート」や『日本占領下香港で何をしたか』（前掲）をご覧いただきたいが、広東語と粵劇が大好きな、人のいい日本人青年が、戦争の最中に留学したことで、外交や軍の手先となり、のちのち強く後悔する任務に手を染める。戦後の悔恨のなか、中国に対する観察を、自らの経験を通じて語りつつ記したのが、「私の中国人ノート」のシリーズだった。時代が違っていれば、希代の京劇通だった辻聴花の向こうを張る、粵劇通となっていたかもしれない。戦前の廣州や香港を知る絶好の読み物を提供してくれていたかもしれないと思うと、際会した時代の抗いがたさを思わずにいられない。

おわりに 戦後の交流

和久田幸助は戦後、東京に住み、年に数回香港を訪れて旧友たちと交歓するのを楽しみとした。和久田の著作に生計に言及した記述がないため、具体的にどのような生活をしていたのかわからないが、たびたび香港に遊び、著名画家の絵画や翡翠の指輪などを購入し、また趣味で能の近藤乾三や狂言の野村万蔵の会の世話などをしていたことから、手元不如意だったとは思われない。

香港訪問を重ねるごとに、「あの動乱辛苦の青春時代に友情をあたため合った香港の映画演劇人達とは、顔を合わせるたびにますます親密さを深め、彼等との隔意のない話は、私にとつて、中国と中国人をより一層身近なものにしていった」（続「友あり——呉楚帆」一九六頁）。占領期に知り合った呉楚帆や張瑛（一九一九—八四年）とは、香港に行けば、「必ず旧交をあたたためあう仲」だとするように（新「香港獅子会に招かれて」一〇〇頁）、「私の中国人ノート」を読むと、戦前からの旧友たちがしばしば登場し、和久田の来港を歓迎している。粵劇の名優新馬師曾は、和久田を初対面の相手に紹介するときは、憲兵隊で救出されたことを持ち出して、「私の命の恩人」だと語って和久田を赤面させた（続「新馬師曾と私」一六九頁）。呉楚帆は、和久田が敬愛する洋画家、林風眠の香港での個展にわざ

わざと同行してくれた。おかげで絵を購入する際に、呉の顔で割引されたという（最新「中国絵画から生れた四つの短文」九六頁）。同様に、「私は従前から粵劇界に友人知己が多く、香港に行けば、一緒に食事をしたり、話したりすることを楽しみの一つにしてい」て、この年の旧正月訪れた際には女優の白雪仙（一九二六年）から招待された（『能の素晴らしき狂言の面白さ』前掲、九四頁）、といった記述は和久田の著作の随所に見られる。

香港の友人たちが東京を訪れた際には歓迎した。胡蝶は戦後何度か来日し、和久田と会食した。戦争中、胡蝶が香港を脱出した日、電話が一向にかからないことに業を煮やした和久田が、軍に報告して探したものの、見つからず、のち責任を問われた、と胡蝶に語ったという（『胡蝶回憶録』前掲、一九一頁）。和久田の方もこの件について、「梅蘭芳と胡蝶」（『続』）に同内容の記述を残している。

和久田は何人もの友人の息子や娘を「契仔」とした。和久田によれば契仔とは、「広東人の中にある風習の一つで、男女を問わず、或る若者が私を義父にと望んだ時、私が承諾すれば、その若者は私の子供同然となり、以後、契仔と呼んで、父親的な配慮をするようになる。又若者の方も、私を契爺と尊称して、父親並の扱いをする」という（『続』「恐ろしい日本人」一一〇頁）。その中には、父親を日本軍に殺された「契女」もいた。和久田が香港来ると空港に出迎え、宿泊先を提供し、和久田の友人

たちが来ると歓迎した。

香港占領時、梅蘭芳と会見する際に同席した、左派の映画演劇人S氏とは、長く友情を積み重ねたが、梅蘭芳の息子が香港公演を行った際にはチケットを用意するなど尽力してくれ、「あれから、一体何年たっただろう……四十一年になるのかなア……あなたは日本人、私は中国人……よく、こんなに永く、仲良くしてこられたもんだね」と語ったという（新「友情と京劇の醍醐味」三三三頁）。

「日本人が好きだ」と心から言う中国人に会ったことがないと記す和久田だが、香港の友人たちに対し、「私も日本人だけど、なぜこんなに親しくしてくれるの」と質問したことがある。「あなたは日本人じゃないみたいだから」との答えが返ってきたが、広東語話者である以外に、自身が抱きつづけてきた「過去の罪業を思つての贖罪感」があるのではないかと和久田は推測する。

私自身は戦火の中においても、中国人に向かって残虐行為をしたり、戦勝者としておごり高ぶったおぼえはなく、日本人の残虐行為や戦勝者のおごりに苦しみ悩まされ続けた中国人の人々の心情と怨念を、むしろ加害者側なればこそ一層深く受けとめ、その贖罪感をなにかにつけて、言葉や行為のはしはしに表わそうと努めたからではないだろうか？

新「日本の歴史教科書検定問題」三八頁

日本の侵攻で家族が、友人知人が犠牲者となり、苦難を強いられた人々が、内心どう思っているかわからないのは、和久田が「私の中国人ノート」でくり返し書いたことである。香港の人々が、和久田の来港をどう受けとめていたのかはわからない。しかし、交流が戦後長くつづいたことは間違いなく、心底嫌っていたら、年に何度も訪ねてくるこの日本人を、歓迎することは困難だろう。人間は、やったことは忘れても、やられたことは忘れない。和久田の戦争中の言行が目にも余るものだったなら、いくら贖罪の姿勢がうかがえても許せるものではなからう。今後さらなる資料発掘により、和久田幸助の華南経験とともに、戦前にあつて稀な香港人と日本人の交流の実情がより明らかになることを期待したい。

注

- (一) 相田洋『シナに魅せられた人々 シナ通列伝』（研文出版、二〇一四年）。「シナ通」についてはほかに、「村上知行の〈北京〉」（『立教大学日本文学』第九十四号、二〇〇五年七月）など、石崎等に一連の論文がある。佐々木到一など、軍人の「シナ通」については、戸部良一『日本陸軍と中国』（講談社選書メチエ、一九九九年）に詳しい。
- (二) 戦前の和久田幸助に対し、中国を南方から観察した、戦後の「南中国通」といえば、島尾伸三（一九四八年）がおり、『香港市民生活見聞』（新潮文庫、一九八四年）以降の数多くの中国ものには濃厚な華南の空気がある。

- (三) のち、梅蘭芳・馬連良・程硯秋『中国戯劇大師の命運』、明月、四十年精品文叢（作家出版社、二〇〇六年）などに収録された。
- (四) ほかに、佐々木陸『香港攻略 英国崩るるの日』再考 日本軍占領下香港における祝祭とメディア（『人文学報』第四百三十三号、二〇一〇年三月）も和久田に言及する。
- (五) 和久田は「私の辛亥革命七十周年」（『続統』）で、一九三二年、数え年の十八歳で、広東広西を旅行した、と回想する（六八頁）。もしかすると、ある時点で一九三四年の広東広西旅行を、三二年の経験と記憶違いし、その後間違え続けたのかもしれない。
- (六) 天理大学五十年誌編纂委員会編『天理大学五十年誌』（天理大学、一九七五年、六〇―七二頁）。
- (七) 和久田以前に広州で留学生生活を送った著名な日本人には、和久田の一回り上の詩人、草野心平（一九〇三―八八年）がいる、自伝『茫茫半世紀』（新潮社、一九八三年）等を参照。
- (八) 韓燕麗『国防映画運動とは何か 戦時中の中国における抗日をテーマとする映画の製作について』（『中国社会主義文化の研究 京都大学人文科学研究所附属現代中国研究センター研究報告』（京都大学人文科学研究所附属現代中国研究センター、二〇一〇年五月）。
- (九) 中日文化協会の南京総会や上海分会については研究がある、大橋毅彦・趙夢雲編『上海中日文化協会研究・序説 現地新聞メディア掲載の協会関連記事一覽』（非売品、二〇〇四年）、杉野元子「南京中日文化協会と張資平」（『藝文研究』第八十七号、二〇〇四年十二月）など。
- (一〇) 引用は胡蝶『胡蝶回憶録』（胡蝶口述、刘慧琴整理、文化芸術出版社、一九八八年）、一八九頁の拙訳による。
- (一一) 引用は胡蝶『胡蝶回憶録』（前掲）、一九〇頁の拙訳による。
- (一二) 宜野座菜央見「映画人・川喜多長政の戦略性 田村俊子との対照」

〔大阪経済法科大学アジア太平洋研究センター年報〕第十七号、
二〇二〇年）は、川喜多の「成功」と和久田の「失敗」を対比し
ている。

ある日本人の香港体験

——和久田幸助覚書——

大 東 和 重

戦前の広州や香港に滞在し、戦後その経験を記録に残した日本人に、和久田幸助がいる。天理外国語専門学校で広東語を学んだ和久田は、一九三四年、初めて華南地方を訪れ、やがて広州に留学し、一九三七年の日中戦争勃発後、香港へと移動した。一九四一年に太平洋戦争が勃発すると、香港占領軍に徴用された和久田は、芸能班長として香港支配に関わった。粵劇や映画の愛好者だった和久田は、香港での工作を通じて数多くの中国の演劇・映画人と交流を持った。戦後香港を度々訪れては、旧交を温め、自らの経験を「私の中国人ノート」などに記した。和久田の経歴については不明な点が多いが、本論文では和久田自身が戦前戦後に書いた記事や書籍などをもとに、その香港体験の輪郭を描いた。

一個日本人的香港體驗

——和久田幸助備忘録——

大 東 和 重

「和久田幸助」一位曾在戰前的廣州和香港逗留過，並在戰後以文字紀錄下他當時經歷的日本人。和久田曾在天理外國語專門學校學過廣東話，1934年初次造訪華南地區，緊接著到廣州留學，1937年中日戰爭爆發後搬遷到香港。1941年太平洋戰爭爆發後，和久田被香港佔領軍徵用，擔任與香港統治相關的藝能班班長。粵劇和電影愛好者的和久田透過這份香港的工作和眾多中國戲劇電影人交流。戰後和久田多次回訪香港和舊友重溫，同時將自己的經歷收錄在《我的中國人筆記》等文章中。和久田的生平仍有許多不明之處，本文以和久田在戰前和戰後所寫的书籍和書籍未收錄文章為根基，試圖描繪他廣州香港時期的輪廓。